

四明嶽の月

叡山四明嶽に、腰をおろして、月をみる一人の僧があつた。

建長五年の早春である。折から夜霧がむくむくと脚下より湧き起つて、今までみえていた京の街の灯も、みえなくなり、月光を川面にすつて、一条の銀蛇の如くみえていた鴨川のうねりもやがて、霧に消されてしまった。

みえるものとしては、天空の月一つ、月明に星さえみえぬ夜であつた。

月に対して黙想する、その僧の姿は、傍観すれば、古淡な一幅の名画と言えようが、その人の脳裡に深く立ち入ってみれば、まさに山上火を吹くの感慨があつたのだ。

二十一歳、叡山に登つてここに十二か年、その間二十五歳の寛元四年には、叡山の宿敵たる三井園城寺に留学して、その宗風をきわめたが、今にして思えば「智証の門家三井園城寺、慈覚の門家叡山と、修羅と悪竜との合戦隙なし、園城寺を焼き叡山を焼く、智証大師の本尊慈氏菩薩も

焼けぬ。慈覺大師の本尊大講堂も焼けぬ、現身に無間地獄を感じり」の所感にすぎなかつたといえよう。一度叡山に帰つたが、二十七歳寛治二年、南都に入つて三論法相の古宗の教理を探り、更に紀州高野山に登つては真言の秘法を究め、帰途には摂州天王寺に寄つて、聖徳太子の教旨を窺ひ、二度び叡山に帰つた。

叡山にあること二年、建長三年三十歳の時、再び山を下つて京洛の地、教王護国寺（今の東寺）御堂の仁和寺に入つて不審を正し、傍ら儒典、国学、書道等の各大家の門を叩いて三度叡山に帰つた。

それより二か年、叡山にあつたが論議の勇将たる学頭として、東塔、西塔、横川の三塔を押しつゝ、

今四明嶽に月と對して、現在の十宗を端的に批判するならば次の如しだ。

俱舍宗は、過去の小乗教。

成実宗は、大乘小乗混合して明白なる誤りがある。

律宗は、もとは小乗教であつたが、中頃は権大乘教今は自分自身で大乘教だと錯覚しておる宗旨。

法相宗は、もとは権大乘の中の浅薄なる法門であつたが、次第に増長して、他の大乘教を打ち

破ることが出来ると思っておる、謀叛人平将門純友の如き宗旨で、下にいて上を破るものである。

三輪宗は権大乘の空の一分であるが、自分は実大乘だと自惚れておる。

華嚴宗、これは権大乘であるが、他の権大乘よりはましである。摂生関白の如きだが、法華を敵として立てる宗なる故に臣下の身をもって、大王の位につかんとするが如きである。

浄土宗も権大乘の宗旨であるが善導、法然が、たばかりによつて、念仏をもって末法の機に適合となし、人心のみを主にして、一代の聖教を否定するという立場をとつてゐる。

禅宗は一切経の外に真実の法ありとなす、これは親を殺して子を用い、主を殺せる臣下を用いるが如きものである。義朝は父と弟を殺し清盛は叔父を殺す、親子、兄弟、叔父、甥の戦いという保元平治の乱に似ておる。

真言宗は道理文証にしかず。承久の乱をみれば分明である。国敵王敵となるものを降伏せしめて、命をとるといふ。十五垣の法を京洛の地の、七大寺十五大寺が修したにもかかわらず、その満願の日に、官軍は敗北し、三院はいけどられて九重は一時に焼失し、三院三国に流罪という、皇国未曾有の出来事を惹起せしめた、これ偏えに真言の罪である。

思うに此等の十宗は、仏の滅後に、天竺、支那の法師、論師が建てられた宗旨であつて、仏の自ら建てた宗旨ではない。

仏もかかる蘭菊の美を競う宗旨の起ることを予想せられたか、涅槃經の御遺言には、

「法ニ依リテ人ニ依ラザレ、義ニ依リテ語ニ依ラザレ、智ニ依リテ識ニ依ラザレ、了義經ニ依リテ不了義經ニ依ラザレ」と戒められておる。

この御遺言によつて、一切經を読むべきであり、滅後の宗見をもつて、一切經を計るべきではない。

經文を先きとして考えたる十二年間の研鑽の結果は、法華經こそ、如来出世の本懷也の一大確信であつた。

しからば、その法華經をもつて建てられたこの比叡山が何故今日のていたらくになつたのであるのかの疑問が湧く。

研鍛十二か年、それも解決した。

即ち大集經には、仏滅後の時代を、正法千年、像法千年、末法万年とされて、正法千年を第一解説堅固、第二禪定堅固の二つの五百年に区分し、像法千年を第三誦誦多聞堅固、第四多造塔寺堅固の五百年あてにくぎつておる。末法は万年と規定し、その末法に入つての五百年を、第五闢諍堅固と言ふ。

堅固とは約確にして相違なしの意味であるが、釈尊の滅後、時代は實に大集經所説の如く推移した。

鎌倉に三か年、叡山に十二か年、十五か年間の研鑽の結果、法華經こそ如来出世の本懐也と確信した。その法華經の中には、法華徑が流布すべき時代すら指定されておる。

即ち薬王品に

「我が滅度の後、後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布して断絶せしむることなかれ」とある。

後の五百歳とは、大集經に言える第五闢靜堅固の時代を指すのである。

世界史上にも類例のない四百年の長きに渡った平安朝の泰平の夢が、一朝にして破れると、保元より承久三年に至る僅か六十五年間は、これまた、世界史上に無類とも言うべき、一大闢靜動乱の世であつた。

三上皇を流罪して、天下は北条に帰し、干戈劍撃の響きは一時鳴りをひそめたが、承久の乱の翌年より今年二十二年の間、京鎌倉に大地震のあること都合四回、大風等の天変のあること十二回、疾病流行の年が十二年、洵に生あることが不思議とも言うべき世の中である。

法華經流布の時は、悪世末法とある。

伝教大師は法華流布の時を末法の始めといわれて、自身が仏滅後、一千八百余年の、多造塔寺時代に生れたことを歎かれておる。

宣べなるかな、伝教大師の教法は、僅か数年にして断絶してしまつておるのではないか。

法華經の流布すべき、第五の闢靜堅固の時代とは正しく今である。すでに仏の予言せられた末

法に入り、經文の如く法華經の流布すべき時になつておる。然るに禪宗を弘めた榮西、浄土を弘めた法然はあつても、法華經を弘めたものは何処にもない。時は正に至れりと言ふべきではないか。

「おう……」

と声をかけて、その人は、海技二千七百二十三尺の、四明嶽の岩上に立ち上つた。

折柄、脚下の夜霧は天上の月もかくして、身はさながら虚空にあるが如く、天上天下ただ我一人ありの觀があつた。

その人とは、仏滅後二千百七十一年に生れたる、末法の大導師たるべき、日蓮大聖人の若き日の姿であつた。